

“ふれあいの赤いエプロンプロジェクト”の 展開におけるプロジェクトマネジメント

～課題へのアプローチ方法と従事者の意識～



○ 黒田藍¹⁾²⁾ 木下ゆり²⁾³⁾ 久地井寿哉²⁾ 伊東尚美²⁾⁴⁾
佐藤香菜子²⁾⁵⁾ 石井なつみ⁶⁾ 鍋谷照⁷⁾ 福田吉治¹⁾²⁾

1)帝京大学大学院公衆衛生学研究科

3)東北生活文化大学短期大学部

5)中京学院大学短期大学部

6)久留米大学人間健康学部

2)ふれあいの赤いエプロンプロジェクト評価チーム

4)福島県立医科大学医学部

6)医療法人かしの木内科クリニック

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業は以下のとおりです。

木下ゆり 過去1年間を通じて

<受託研究> 公益財団法人味の素ファンデーション

背景

味の素株式会社、及び味の素ファンデーション(The Ajinomoto Foundation : TAF)は、東日本大震災後、東北3県で復興応援事業「**ふれあいの赤いエプロンプロジェクト**」を実施

事業目的	①被災者の <u>食生活と栄養状態の改善</u> ②災害で破壊された <u>地域コミュニティの再生・活性化への貢献を通じた復興応援</u>
事業内容	各地域の <u>パートナー団体(行政、社会福祉協議会、自治会等)と連携した取組</u> アウトリーチ型「料理教室」
テーマ	いっしょに作って、いっしょに食べよう

<活動実績> 開催回数:延**3,771**回 / 参加者数:延**54,434**名

食をテーマにした8年半にわたる被災地支援の活動として他に類のない活動。

背景

◆ 本プロジェクトの第三者評価の結果

破壊された地域コミュニティや人々のつながりを復活するための

「**人々の心と身体を元気にする**」画期的な介入モデル

本報告では、本プロジェクトが味の素・TAFによりどのように実施されたのか、プロジェクトマネジメントについて報告する。

【報告の特徴】

パートナー団体・TAF・第三者評価チームによるアクションリサーチの一環として実施

ふれあいの赤いエプロンプロジェクト アクションリサーチ関係図



パートナー団体

連携したプロジェクトの
実施



コンテンツの提供



公益財団法人
味の素ファンデーション

プロジェクトを一緒に実施・評価しながら、
効果や課題を共有し、
より良い活動展開・水平展開につなげていく
～関係者がそれぞれエンパワメントされる関係～

評価のフィードバック
活動への学術的サポート
活動への参加

取組等の情報提供



評価チーム(研究者)

評価のフィードバック
プロジェクトへの
学術的サポート

プロジェクトの
情報提供

方法

TAFスタッフのうち、

- ① プロジェクト開始時に支援マネージメントに関わったスタッフ1名
- ② 現地で活動したスタッフ2名
- ③ 2020年時点の統括マネージャー1名

計4名に対し2020年7月から8月にインタビュー調査を実施

上記内容からマネージメントの要素と従事者の意識を抽出し整理した

主なインタビュー内容

- ①味の素・TAF側の活動体制
- ②パートナーへのアプローチ方法
- ③教室を継続するための工夫・意識
- ④プロジェクト展開による地域コミュニティへの影響

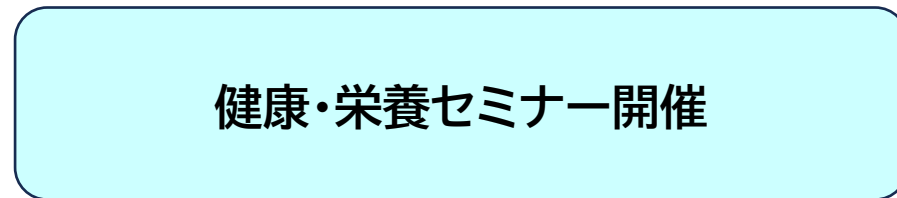
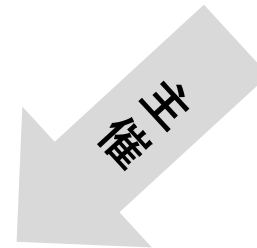
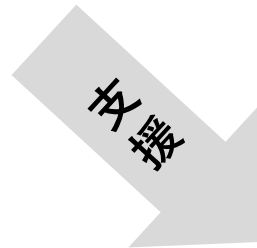
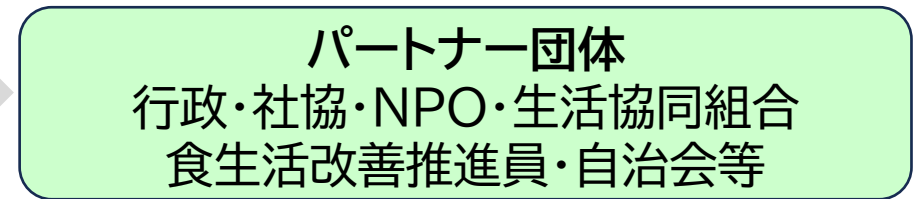
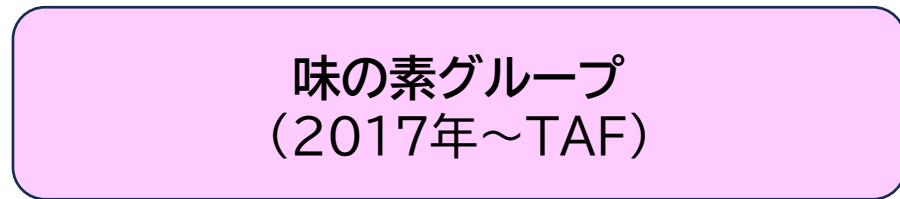
【倫理的配慮】

味の素・TAFとパートナー団体への聞き取り、及びアンケートは、2019年～2021年に帝京大学がTAFからの委託を受けてプロジェクト評価の一環として実施した。データの二次利用については、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た。

プロジェクトの実施体制

講師・運営スタッフ・ボランティア派遣
移動式調理台等を積み込んだトラック
調理台・食材・機材・衛生用品などの物資提供

スケジュール・セミナー内容の調整
開催場所の確保・セミナー開催の周知
チラシ作成・配布・参加者とりまとめ等のサポート



食生活改善・栄養に関する情報提供
「いっしょに作っていっしょに食べる」交流の場の提供

プロジェクトに関わる基本姿勢

「被災地に寄り添う」という一貫した基本姿勢での取組

◆味の素・TAFが持っていたコミュニティ再生のイメージ

すべての人々を巻き込んだ、各地域における自助・互助・共助力の復活、
または再構築に共に取組ながら再生していく

◆プロジェクト開始当初から味の素・TAF撤退後の活動の持続可能性(自走化)を意識

パートナー団体と「相手の意志を尊重し、それに沿って初めから一緒にやる」ことで、
パートナー団体の信頼を得て協働体制を作り、地域の主体性を発揮していただく
ことを一番大切にしていた

執行体制

◆ 被災地に拠点を置き、担当者が駐在

駐在させたことの効果

効率性、情報収集力の向上、パートナーとの関係性の構築を促進



基本姿勢の「寄り添う」ことに大きく関与

◆ 月1回の情報共有と実態把握の会議を開催

活動のキーとなる料理教室のメニューについて、作成する栄養士にタイムリーにフィードバック



活動の質の向上に寄与



活動場所地図



地域への介入方法

◆ ステークホルダーの状況を早期に把握

気づき

被災地で支援に当たる組織(行政機関等)への支援が十分でない現状

*本プロジェクトにおけるパートナー団体



サポート役に徹する姿勢

「何がしたいか」ではなく、
「何ができる」を伝えて、
「利用してもらう」

◆ 状況や心情を把握したうえで関係者と連携し、意見を伺いながら進めることを徹底

パートナーとの連携がなければ、本当に支援を必要とする人へのアプローチが難しかった

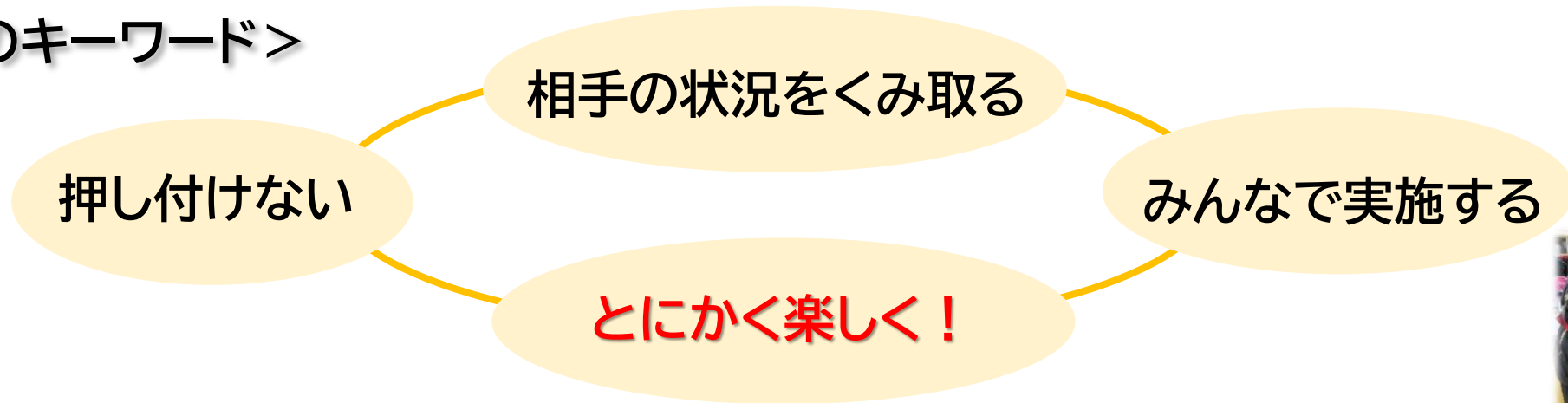
*福島においては、原発事故による避難という背景の中、個別事情に配慮した場づくりを意識し、復興住宅の入居者状況、自治会の成熟度や経緯なども考慮

◆ パートナーと参加者、味の素・TAFの3者の今後につながる実施目標を設定

プロジェクトの運営①

パートナー団体	味の素・TAF
場所の確保・参加者の募集	食材の確保・レシピの提供 調理器具の提供・衛生管理・料理教室進行

<運営のキーワード>



全員が何かの役割を持ってもらうよう意識



大きな声で担当者が仕切り各作業を一緒に順番にやっていく方式で実施

安全衛生管理(けがや事故、食中毒予防)・活動の中で取り残されないことへの配慮

プロジェクトの運営②

◆ 料理教室の位置づけ

単なる「料理教室」ではなく、
「仲良くなる」ためのツール、「ふれあいの場」づくりの手段としての料理教室



全員参加型とすることで、単なるコミュニティの再生ではなく、参加者に「自分にもできることがある」と誇りを持ってもらうことができた



事故がゼロと1は
まったく違う

◆ 徹底した安全衛生管理

- ◆ 絶対に事故が起きないようなオペレーション考案
- ◆ 手順、方式には一切の妥協を許さず、味の素・TAFスタッフは徹底的にトレーニングして身に馴染ませ、守った
- ◆ 地元の保健所職員にも見学を依頼し、改善点の指摘などをお伺いした(行政との連携)

8年半にわたる活動継続の背景

当初、仮設住宅から災害公営住宅へ移転後の活動は予定していなかった

気づき

転居後の新たなコミュニティ再生の課題



災害によって引き起こされた課題だけでなく、
震災以前からあった、過疎・少子高齢化・社会の変化による
地域コミュニティの課題も含まれる



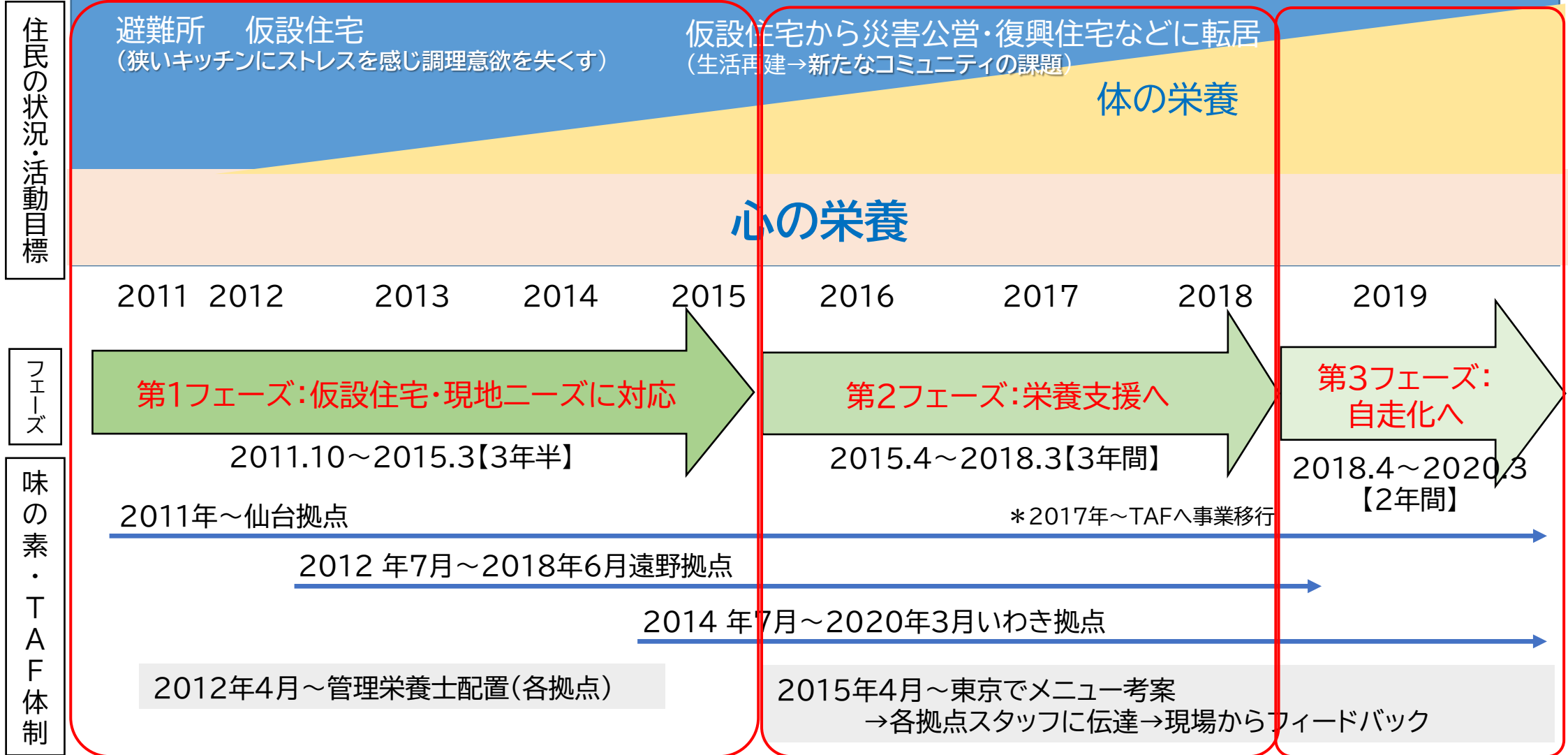
まだ復興半ばであること、平時に繋がるコミュニティづくりの重要性を再認識

プロジェクトの継続を決定

避難所・仮設住宅・現地ニーズに対応
住民同士のふれあい

栄養支援型料理教室に発展
みんなで作るレシピ

地域住民・団体が
運営しやすい方法



被災地に寄り添う姿勢・徹底した安全衛生管理・パートナーとの連携

考察

- 味の素・TAFは将来像の実現に向けて、常にPDCAサイクルを回しながら活動展開

フェーズに応じ被災地のニーズを的確に把握

機動的・総合的に支援テーマを設定

必要な活動体制を構築

- 被災地に寄り添うという思いとともに、ステークホルダーを巻き込みながら活動

→ 的確なニーズ把握や活動継続に寄与していると推察される

食を通じた被災地支援として民間団体が実施した他に類を見ない
イノベーション型の活動の特徴



他の地域において民間団体等が活動する際の参考となることが期待される



本プロジェクトの詳細は、企業展示「公益財団法人味の素ファンデーション」のブースにて紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

～ご清聴ありがとうございました～

いっしょに作って、いっしょに食べよう!

ふれあいの
赤いエプロン
プロジェクト